

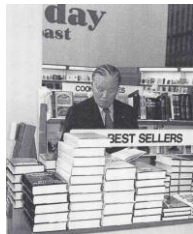
甲状腺外科草子 160 哲人宰相：大平正芳余話②

杉野 圭三

無類の読書家

大平が読書好きであったことは有名である。本好きの大平の残した膨大な資料は国会図書館へ、8,000冊の蔵書は香川県立図書館へ寄贈された。

1979年4月の訪米で、大平は首都ワシントンの公式行事を終えた後、ニューヨーク、マンハッタン三番街の「ダブルデイ書店」に立ち寄り、静かな店内の雰囲気を楽しみ、「ザ・プロフィット」という新しい経済理論の本を購入している。



自宅での読書 N.Y.のダブルデイ書店 茜色の空

「死ぬまでにあと何冊本が読めるかな〜」、祖父の最後となったお正月に、ふとつぶやいたのを父が聞いていた。中略、祖父は読み終わった本をせっせと郷里に送っていたのだが、それは本に詰まった人類の叡智を少しでも郷里の方々と分かち合いたいという気持ちの表れだったのだと思う。

姿が見えなくなって探すと、必ずといっていいほど本屋さんで発見された。総理就任後のある日曜日の昼下がり「総理がいない！」と警護官が必死に探した結果、案の定、町の書店で発見された。東の間のエスケーパー 一本屋さんの書架の前で新刊本を手取る時、祖父はこの上ない喜びと開放感を味わっていたのだと思う。

『本屋の書架で私の足を止めさせるところは、政治、経済、法律などよりは、むしろ歴史、社会、随筆などの書架である。毎週新たに持ち込まれる新刊書の新鮮な香りとそれを手にした柔かい触覚はたまらなくうれしいものである。生きる喜びを味わうことができる瞬間である(春風秋雨改)』

このように、祖父は古書や稀覯(きこう)本の収集などではなく、新刊本を手にとすることに喜びを感じていたようだ。(祖父 大平正芳)

大平はまた、次のようにも述べている。

『どんなに身辺が多忙であっても週に一度や二度はぶらっと本屋をのぞくことにしています。中略。ひとわたり、新刊コーナーのタイトルを眺めただけで世の中の推移が判るような気がします。そこには人々が何を考え、何を欲しているか、またかつて人間は何を問題としたか、その顔、目、心などが硝子ごしのそれのように透明にのぞけるように思われるのです。読書は魂の糧で、とくに俗事

にとりまぎれ勝ちの政治家にとっては、精神の浄化、発想の鮮度と時世への嗅覚の涵養に欠かすことのできないものです。中略。私の選択は政治や経済のものよりも、今日の生きた記録の盛られている社会物に向かい勝ちです。軽いものでは、随筆、伝記の類に手が出がちです。

ことに、政治をやる人間は、小説を読まなければいけないと思います。小説というものには人間生活全体が現れています。小説から、われわれはしばしば深い問題意識が触発されることがあります。文学と政治は不可分な関係にあるようです。そういう意味で小説をもっと読みたいのですが、正直に言って小説まで手が出ないのが残念です。

好きな現代作家は司馬遼太郎です。彼の主要作品は殆ど読んでいます。彼の大阪人らしい“人間中心”の史眼、発想の原点、それに柔軟鮮烈な把握力には、政治家としてはもとより、それ以前に人間として教えられる所が多々あります(前進改)』

辻井喬のペンネームで大平の自伝「茜色の空」を著し親交が深かった堤清二(西武百貨店会長)も次の様に大平の回想録追想編に述べている。

お邪魔すると、いつも先生が腰を下す椅子の傍らには十数冊の本が積まれ、丹念に眼を通しておられる姿にぶつかった。総理になる前、「日本の政治風土では、あまり本を読むと総理になれないという意見がありますから、気をつけて下さい」などと、違う世界に住んでいる後輩の気易さで愚見を述べたことがある。「そうかね、これはもう習性みたいなものでね」と、その時、先生は苦笑していた。これは私事にわたって恐縮けれども、私がある雑誌に連載した作品が本になったのを、「北海道に遊説に行く飛行機の中で読んだ」といわれて大変驚いたことがある。「君は商売を間違えたんじゃないかね」と、その時はからかわれた。私が自分の文学作品について政治家から感想をうかがったのは先生だけであった。

鎌田志賀子氏(同志社女子大学国際関係論、一橋大卒)は渡邊満子(大平の孫)に次のように述べている。「貴女のおじいさま」に一メートル以内で何度もお目にかけました。虎ノ門書房の二階で。どんな本を買うのかちらちら盗み見していました。あのポジションにありながら、どんな学者だってレクチャーに馳せ参じるであろうに――幅広く何冊か買われる中に、必ず有斐閣の基本的な財政論や国際金融論が入っていたのを覚えています。大先輩は勉強家だったのですね。あれから35年以上の歳月が流れ「虎ノ門書房」は学ぶことを大切に思う総理大臣の来店を待っているようですが。

参考資料：大平正芳回想録追想編、祖父大平正芳

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2025年11月26日